思想史における一九三〇年代――京都学派の位置――

藤田正勝

一九三〇年代は政治や経済の面で大きく揺れ動いた時期であるが、思想史という観点から見たとき、きわめて豊かな成果が生みだされた時期でもあった。一九一〇年代から二〇年代にかけての主要な思想潮流を文化主義・教養主義という言葉で言い表すならば、三〇年代は、政治や経済の領域での大きな変動のもとで、現実により密着して思想の産出がなされた時期であると言うことができるであろう。

アカデミーの内部で言えば、それまでの西洋思想の受容を踏まえて、自立した歩みがなされた時期であった。そしてその中核を担ったのは西田幾多郎、田辺元をはじめとする京都学派の哲学であった。彼らの生みだしたものは狭い意味での哲学にとどまらず、人間学、倫理学、歴史哲学、科学哲学、宗教哲学、美学などさまざまな領域にわたるものであった。西洋と東洋の思想的伝統を踏まえ、また相互の批判や論争をばねに、多様な領域において、独自の思想的営為の成果が生みだされていった。

これら一九三〇年代に生みだされた思想が、日本思想史という文脈のなかでもった意義、そしてそれがもつ可能性について検討してみたいというのが、本シンポジウムのねらいである。

「思想史における一九三〇年代――京都学派の位置」というテーマは、「思想史とはなにか」、あるいは「日

本思想史（学）とはなにか」といった問い、あるいはそれに対する答え（共通了解）を前提にするが、それには立ち入らず、一九三〇年代に京都学派の思想が占めた位置に議論の焦点をしぼりたいと考えている。もちろん「京都学派とはなにか」ということも問わなければならない問いであるが、さしあたって西田幾多郎と田辺元を中心にして、その影響を直接に受けとめた者たちが形成した知的ネットワークとして理解し、そこから生みだされた思想の特質と意義とを探ることにしたい。

本シンポジウムでは高坂史朗、米谷匡史、中岡成文の三氏に提題を依頼したが、高坂史朗氏には、一九三〇年代の京都学派の思想が全体としてどのような特質をもつものであったのかを、とくにその歴史哲学、社会哲学、国家哲学の領域での展開に注目して明らかにしていただきたいと考えている。

米谷匡史氏には、太平洋戦争期に京都学派の何人かの哲学者によって構想された「世界史の哲学」を、従来のように西洋と東洋という対立軸においてではなく、むしろ東アジアという思想空間においてとらえなおし、それがいかなる広がりをもったのかを考察していただきたいと考えている。

中岡成文氏には京都学派の科学論、具体的には、田辺元、下村寅太郎、近藤洋逸らによって展開された科学論を取り上げ、それを同時代の西欧の科学論と対比することによって、京都学派の科学論の特質と、それがはらむ問題点を明らかにしていただきたいと考えている。

この三人の提題者の報告を出発点として、一九三〇年代という時代の枠のなかで――言いかえれば、その歴史的な状況のもとで――京都学派の思想がどのように展開されたのか、そしてそれはどのような特質をもつものであったのか、あるいはどのような意義をそのなかにみとめることができるのか、といった点について議論ができればと考えている。

（京都大学教授）